

シニア世代こそ、デジタルで広がる

今やあらゆる分野でデジタル化が進む時代。
「タブレットがシニア世代と相性がいいことを、私自身、実感しました」

全人口の約3割を占めるシニア世代が情報弱者にならないことは、社会的にも大切です。また、歳を重ねると身体が利きづらくなってきますが、どこにいても人や社会とつながりを持つことができるのが、デジタルならではの魅力。さらに、タブレット端末のように指先を日常的に使うことは、脳の活性化にも繋がります。まずは、「壊してしまいたい」と怖がらずに触ってみていただきたいですね。

私が、シニア向けのデジタルサービスを通じて目指しているのは、時代やニーズの多様化に対応した、新しい価値観の創出です。また、700万人ともいわれる団塊の世代がシニア世代の仲間入りをし、シニア全体の「デジタル」に対する意識も大きく変わっていくことへ、しっかりと応えていきたいと考えています。銀行にも同じ方向性が求められているのではないのでしょうか。

「知らない・使わない」と、デジタル機器を敬遠してはもったいない。これからの人生を「アクティブに楽しむツール」として、そしてご自身の終活にも繋がっていく「心強い味方」として、その可能性を、より多くの方に、ぜひ一度体験してみていただきたいと思います。

アクティブシニアの可能性を
広げるデジタルを、
もっと活用してみませんか？

「私」らしい人生

「エンディングノート」も例外ではありません。
とおっしゃる藤澤修三さんのお話からは、新たな『終活』のスタイルが見えてきます。

お話を伺ったのは…

デジ・アド株式会社
代表取締役社長
藤澤 修三氏

Profile
1948年生まれ。大学卒業後、40数年、福岡のマスコミ界に従事。その間、広告会社経営を経て、2012年8月にシニアに特化したデジタルマーケティング会社「デジ・アド株式会社」を設立。自らプロデュースした「私ノート」の魅力を伝えるエバンジェリスト(伝道者)として、セミナーなどでも活躍中。



皆さんは『終活』、特にエンディングノートに関心をお持ちですか？
もしそうなら、何のために書こうとお思いですか？

シニアにとって『終活』とは、人生を前向きかつ計画的に生きるための手段だと私は思っています。そのためには、「好奇心」を感じている身近なことや、「これからやってみよう」という「欲求」に、一歩踏み出すことがスタートです。その作業を楽しくしてくれるのが、タブレット端末などのデジタル機器。デジタルなんて自分には縁遠い世界…」と思っている人も少なくないようですが、実はデジタルとシニアは好相性なのです。4、5年前まで100%アナログ人間だった私が言うのだから間違いありません。

「でも、やっぱりデジタルなんて無理…」
そう思っていないませんか？

パソコンとはまるで違い、テレビのリモコンと同じように手軽に、思いのまま、簡単に操作ができるデジタル機器、それが、タブレット端末です。私自身、タブレット端末を通してデジタルの楽しさや面白さをはじめて気付くとともに、デジタル機器だからこそ、シニアライフの可能性を広げられると思うようになりました。

そもそもデジタルの活用は、若い世代以上にシニアの皆さんにとって大きなメリットがあるのです。なぜなら、デジタル機器を味方に、シニア世代が持つ「ゆとりある時間」や、これまでの人生で培ってきた「豊富な知識と経験」、「バイタリテイ」を有効活用できれば、新たに自分を表現・発信する手段が得られるから。また、新しい生き方を見つかることも可能です。その証拠に、デジタル機器を

時代・世代を繋ぐ デジタル版「エンディングノート」



藤澤さんが
総合プロデュースする
シニア向け終活アプリ
『私ノート』

プロフィール
作成イメージ

<特徴>
・写真や動画を使った「自分まとめ」が可能
・何度でも書き直しが簡単
・未来永劫残る
カテゴリーは全8種類
これまでの自分(生い立ちや家族への想い、思い出など)と、これからの自分(やりたいこと、葬儀やお墓への意向など)をまとめることができます。

使った「終活セミナー」に参加するシニアが急増しています。デジタル機器をうまく活用すれば、「自分の最期をこれから考える」という終活に対するシニアなハードルも、高いものではなくなるのです。

こう聞くと、触ってみたくありませんか？好奇心を感じたら、体験してみよう。
それがアクティブシニアです。

最初のきっかけは、「孫の写真を撮りたい」「友人との交流を増やしたい」といった身近な目的でいいのです。そこから楽しく操作方法を学んでいくうちに、写真や動画を活用した自分のプロフィールができていきます。そして、いつの間にか、エンディングノートに必要な「自分まとめ」もできてしまふ。こうしたデジタルの魅力を活かせば、終活にも繋がる仕組みが作れるのではないかと、考案したのが『私ノート』です。『終活』を、ノートや紙に向かい、構えて始めるものとしてではなく、自分の欲求を叶えていくためのものと捉えていただきたいと思います。

「タブレット端末で何が出来るの？」とよく尋ねられるのですが、「何が出来るか」ではなく、「何をしたいか」が出发点なのです。何より、自分が「楽しい」と思えることへの「好奇心」は、シニア本人を明るくします。また、デジタル機器が「絆」となって新しい交流や思い出も生まれ、自らの人生に残していきたいことがまた一つ増えていくという、まさに「アクティブなシニアライフ」を過ごすことができます。

デジタルでこんなに広がる『アクティブシニアライフ』

ケース
スタディー

まずは、『やってみたい』
と思うことを口に出して
行動してみましょう！

新たな『発信』

シニア世代がこれまで培ってきた豊富な知識・経験を発信する手段となります

たとえば…
得意な農業の知識を
たくさんの人に伝える



新たな『生き方・発想』

今までの既存の概念から、一歩踏み出すきっかけにもなります

たとえば…
e-ラーニングを
通じて、新しいこと
を学ぶ



『時間』と『労力』の 有効活用

加齢に伴う、体力的・物理的制約をカバーできます

たとえば…
旅行を計画する際、
インターネットを使えば、
一瞬で自分の知りたい
情報以上のものを入手
可能



新たな『つながり』

デジタルを通じた出会いや世代間交流ができ、
まわりとの新たな絆も生まれます

たとえば…
藤澤さんが開催するセミナー
では、参加者同士で世代を問
わず旅行やイベントを頻りに
開催
Facebookなどで、多数かつ
遠方の方とも心が繋がる



藤澤さんが昔の写真を
「私ノート」に記したことが
きっかけで実現した、
ご友人との再会。
当時と同じポーズを再現。



はじめの一步は 『身近な欲求』から

たとえば…
・孫の写真や動画を自分で撮りたい
・お友達とメールでやりとりをしたい
・旅行の計画を立てたい



いきなり「デジタル」について
学んでみようとするのではなく、
身近に感じる「やりたいこと」を
きっかけに、始めてみましょう。